

ファンタジーは終わらない～幻想文学の世界へようこそ～

菅井祥子（2022年英語英文学科卒業生）

バレエ『くるみ割り人形』の作曲家といえばチャイコフスキーですが、原作者がE・T・A・ホフマンだということは意外と知られていません。ホフマンは音楽家でもあり、音楽に縁のある小説家です。フケー原作『ウンディーネ』（水の精）*など、自らオペラを作曲したこともあります。

ホフマンの作品は、不気味だけど幻想的、それでいて抗いがたい魅力があります。ファンタジーはしばしば子供の読み物だと思われがちですが、ホフマンに限って決してそんなことはありません。むしろ大人のためのメルヘン（童話）だと言えます。今回は、そんなホフマンの摩訶不思議で奇想天外な小説を数篇ご紹介致します。

*ヨーロッパでは水の精伝説は広く親しまれており、ドビュッシー作曲『ペレアスとメリザンド』のヒロイン、謎の乙女メリザンドも水の精だと言われています。



くるみ割り人形

クリスマスの季節、マリーはドロセルマイヤーおじさんからもらったくるみ割り人形をとっても大切にしますが、兄が乱暴に遊んだせいでくるみ割り人形は壊れてしまいます。お人形を看病するマリーは、あるとき、くるみ割り人形率いるおもちゃたちとネズミが、子供部屋で戦争しているのを見てしまいます。実は、くるみ割り人形は王子様で、敵対するネズミ一族との争いを終わらせるという使命があったのです！恐ろしい七つの頭を持つネズミの王様を相手に、マリーとくるみ割り人形は勝利を収めることができるのでしょうか？！

バレエだけでなく、『くるみ割り人形』はたびたび映画化もされています。今回は2018年ディズニー版『くるみ割り人形と秘密の王国』と、エル・ファニング主演の2010年版『くるみ割り人形』をご紹介します。エル・ファニングは、今では『マレフィセント』のオーロラ姫として世界的に有名です。



2018年版『くるみ割り人形と秘密の王国』では、クララ*が敵対すべきなのは、実はネズミではなく、魔法の国を乗っ取ろうとしていたお菓子の国の摂政シュガー・プラム**でした。大胆な脚色によって、原作を予習している人たちを愉かに驚かさず快作となっています。また、バレエの場面はとて美しく、観ていて心が躍ります。現代のトップ・ダンサーであるセルゲイ・ポルーニンも、優雅な舞を披露しました。不思議なドロセルマイヤーおじさんを好演したのは、名優モーガン・フリーマンです。





ディズニー版『くるみ割り人形と秘密の王国』
ピンクのふわふわに騙されないで！シュ
ガー・プラムは実は…？！



エル・ファニング主演『くるみ割り人形』

2010年版『くるみ割り人形』はミュージカル映画です。バレエ音楽「金平糖の精の踊り」(Dance of the Sugar Plum Fairy)は、日本ではテレビ番組『グレーテルのかまど』でお馴染みの曲ですが、本作でも効果的に使われています。ドロセルマイヤーおじさんの代わりに登場する、陽気なアルバートおじさんが、「金平糖の精の踊り」のメロディに載せて楽しい歌を歌うのです。子供のように楽しいことが大好きなアルバートおじさん。特徴的なふわふわのグレイヘアは、あのアルバート・アインシュタインを思わせます。実際に、アインシュタインは自身の飽くなき探求心を子供のような好奇心に因るものだと考えていました。朗らかで、子供のようなアルバートおじさんは、私たち大人をファンタジーの世界へと導いてくれる案内人なのかもしれません。

また、本作では面白い試みもなされ、原作の雰囲気や損なうことなく、現代的な解釈が取り入れられました。なんと、ネズミ一族がナチスのカリカチュアとして描かれ、独裁政治を風刺したのです。ネズミたちはくるみ割り人形の王子の国を占領し、子供たちからおもちゃを奪い、喜びや笑い声をなくし、世界を灰色にしてしまいます。『ワルキューレ』や『イングリシアス・バスターズ』など、第二次世界大戦を題材にした映画でよく知られているように、ナチスの制服はネズミ色に近いグレイです。ネズミは繁殖しやすく、疫病などを媒介することから忌み嫌われる存在であり、二十世紀前半にヨーロッパを苛んだナチスの表象としてふさわしい存在でしょう。ネズミの王様役、ジョン・タトゥーロの熱演も見どころです。

ちなみに、原作ではドロセルマイヤーおじさんはニュルンベルク出身という設定です。ニュルンベルクは、ワーグナー作曲『ニュルンベルクのマイスタージンガー』で有名ですが、ここは現代でも工房と職人の街として知られており、中でも美しいおもちゃは素晴らしい職人技の結晶です。ドロセルマイヤーおじさんもとても手先が器用な人でしたが、お国柄なのかもしれません。



左)モーガン・フリーマン演じるドロセルマイヤーおじさん
右)ネイサン・レイン演じるアルバートおじさん

*バレエではヒロインの名前はクララですが、原作ではマリーです。クララはマリーの持っているお人形の名前です。2018年版では「クララ」、2010年版では「マリー」(英語では「メアリー」)が採用されています。**Sugar Plumとは、金平糖のことです。

『ホフマン物語』三篇

『ホフマン物語』三篇

(「砂男」、「クレスペル顧問官」、「大晦日の夜の冒険」)

オッフェンバック作曲の『ホフマン物語』は、ホフマンの三篇の短編小説を原作としたオペラです。それぞれ異なった主人公の三作を、作家ホフマンを主人公とした一つの物語としてまとめ、脚色しています。ここでは、「砂男」と「大晦日の夜の冒険」を紹介したいと思います。



E・T・A・ホフマン

「砂男」

ナタナエルが最も恐れるのは、目玉を奪うという怪物「砂男」です。ナタナエルは幼い頃、コッペリウスと名乗る謎の男に父親を殺されました。そのコッペリウスこそ、砂男だったのです！そして大学生になった今、ナタナエルはコッポラという行商人に出会い、コッペリウスがコッポラと名前を変えて再び現れたのだと直感します。また、ナタナエルは、教授の娘オリンピアに一目惚れしてしまいますが、オリンピアはなんと自動人形でした！

ナタナエルとオリンピアのやり取りは、ナタナエルの一方通行で、オリンピアはナタナエルの言葉を繰り返すばかり。まさに、つれなき美女です。星新一の有名なショートショート「ボッコちゃん」に登場する、タイトルロールの自動人形ボッコちゃんは、オリンピアによく似ており、同じように、相手の会話を繰り返します。

オペラの聴きどころは「オランピアの歌」*

です。オペラでは、コッペリウスに眼鏡を売りつけられたホフマンはその眼鏡を掛けると、自動人形のオランピアが美しい乙女に見え、恋に落ちてしまいます。

オランピアのアリアは、しょっちゅう途中で一時停止し

ますが心配ご無用です。オランピアが止まると、ゼンマイを回す音がオーケストラによって再現されて、オランピアはまた歌い出します。機械的な歌声をわざと作るソプラノの妙技に、ホフマンならずとも感嘆のため息が出ることも間違いなし！



《リアル・オランピア》ことパトリツィア・ヤネチコヴァ



推薦ディスク『ホフマン物語』は、珍しいドイツ語版です。機械仕掛けのオランピアは、なんとハーブまで奏でます。

オペラには怪物・砂男は登場しませんが、小説での描写はとても不気味です。「砂男」では、目玉への恐怖が描かれますが、こちらは、後の作家たち、エドガー・アラン・ポーやH・P・ラヴクラフトといった、怪奇幻想小説の名手たちに受け継がれました。ポーの「黒猫」は、黒猫の目つきへの歪んだ執着から猫を殺し、最後には殺人まで犯す、変質的な男の物語です。こうした怪奇ものを得意とするポーですが、「モルグ街の殺人」(1841年)のような、探偵小説も描いており、これは史上初の探偵小説とされています。ですが、ホフマンも「マドモアゼル・ド・スキュデリ」(1819年)といった、実在の女流作家マドレーヌ・ド・スキュデリを探偵役とした推理小説を描いており、ホフマンこそ探偵小説の礎を築いた人物なのかもしれません。

*オペラの戯曲はフランス語のため、「オランピア」ではなく「オランピア」と読みます。



「大晦日の夜の冒険」

本作は、可愛い悪女ジュリエッタに騙されて影を盗まれた男の物語です。原作では鏡像が、オペラでは影法師が盗まれます。実は、ホフマンはシャミッソーの『影をなくした男』を先に知り、この鏡像をなくすというプロットを思いつきました。（シャミッソーはそのことを了解しています）もう一つ面白いのが、シャミッソーの作品で影を盗まれる男、ペーター・シュレミールがホフマンの物語にも登場することです。

ペーター・シュレミールの物語についても、触れておきたいと思います。ペーター・シュレミールは普通の青年でしたが、お金がいくらでも湧き出てくる財布をもらうため、悪魔と取引し、影を失ってしまいます。影を失ったために差別されるペーター・シュレミールは、愛する女性とも引き離されてしまいます。失意の中、ペーター・シュレミールはひよんなことで、一步で長距離を移動することが出来る長靴を手に入れます。最後には、世界中を旅行して植物採集をし、植物学者として成功するのでした。

悪魔との取引はファウストの伝説を連想させます。主人公は取り返しのつかない過ちを犯してしまいますが、それこそが冒険の始まりです。影を失った代わりに、どんな困難にも屈しないことで、ペーター・シュレミールは勇気を手に入れました。これは、平凡な青年が勇気ある人間へと成長する感動の物語でもあるのです。



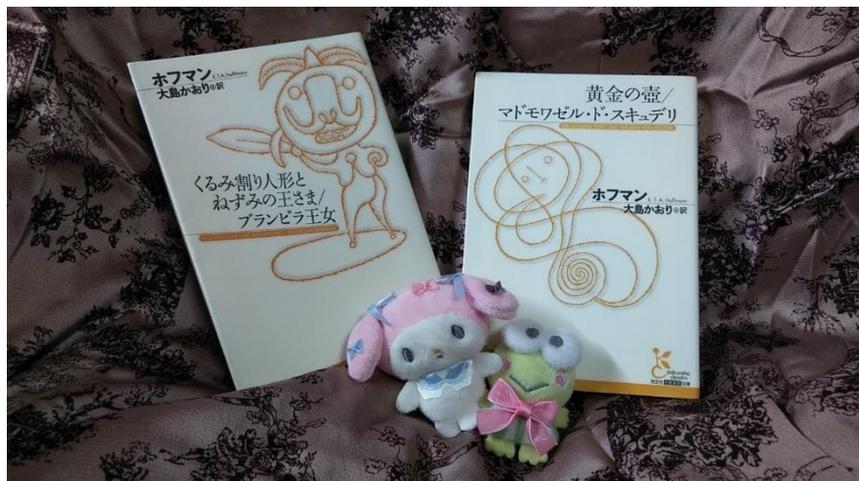
「黄金の壺」

ある昇天祭の日のことです。大学生アンゼルスは、露店のおばあさんの籠にぶつかってしまいます。不連続きのアンゼルスは己の不幸を嘆きます。そんなとき、彼の目の前に金緑色の美しい蛇が現れ、彼はこの蛇に心を奪われてしまうのでした。

一方、副学長の娘ヴェロニカはアンゼルスに恋しており、アンゼルスは現実の世界の恋人ヴェロニカと、幻想の世界の恋人の蛇との間で葛藤します。

アンゼルスは金銭的にも困窮しており、仕事を探しています。そこで、仕事を与えてくれたのが、文書管理官リントホルストでした。しかし、文書管理官というのは仮の姿で、真の姿はアトランティスを統べる火の精だったのです！そして、アンゼルスが愛した緑の蛇は、リントホルストの娘ゼルペンティーナでした。彼女の真の愛を勝ち得れば、リントホルストの持つ神秘の「黄金の壺」も手に入ります。

ところが、行く手に邪魔が入ります。露店のおばあさんは、実は悪い魔女だったので、アンゼルスと緑の蛇から助けてやると言ってヴェロニカを惑わし、黄金の壺を壊そうとします。もはやこれまで、と思われたところ、ゼルペンティーナが「信と、愛と、希望を！」と呼びかけ、アンゼルスは彼女への愛を信じ、老婆の黒魔術と戦います。魔女を倒した後、アンゼルスはゼルペンティーナと結ばれ、共にアトランティスで幸せに暮らすのでした。



文学作品の翻訳なら、光文社古典新訳文庫がお勧めです。
脚注が充実しているので、とても勉強になりました！

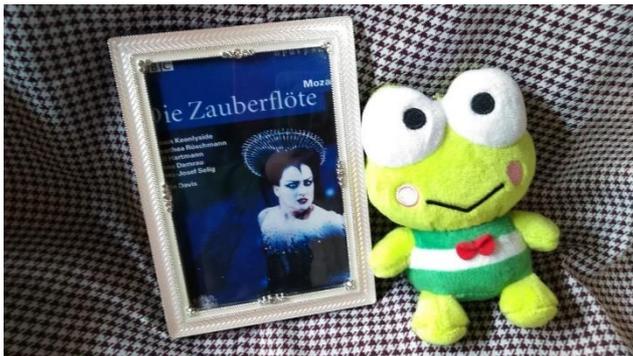
『黄金の壺』は、青年が困難を乗り越えて恋を成就させ、最後には恋人共に理想郷へと旅立つという、主人公の成長を描く冒険ファンタジーです。また、アンゼルスに難題を課すリントホルストか、ヴェロニカを助けようとする魔法使いのおばあさんか、どちらが善でどちらが悪なのか、最後まで読み進めなければ分かりません。こうした、「善玉⇄悪玉」が二転三転するプロットは、モーツァルトの『魔笛』*にも通じるものがあります。

『魔笛』では、王子タミーノが夜の女王の娘パミーナを救うために悪者ザラストロのもとへ乗り込むのですが、実は倒すべき悪は夜の女王であったと知ることになります！試練を乗り越え、ザラストロに祝福されたタミーノは、愛するパミーナと結ばれるのでした。

E・T・A・ホフマン**のAは、ヴォルフガング・アマデウス・モーツァルトの「アマデウス」です。自分の名前に「アマデウス」を入れるほど、ホフマンはモーツァルトに傾倒していました。短編「ドン・ファン」は、モーツァルト作曲『ドン・ジョヴァンニ』への愛がたっぷり込められた作品です。もしかすると、『黄金の壺』も『魔笛』を意識した物語だったのかもしれない。

*『魔笛』は正確には「オペラ」ではありません。オペラは基本的にすべての台詞が歌ですが、『魔笛』では「語る」台詞と歌の部分が別個にあり、一般に歌芝居（ジングシュピール）と言われます。

**本名はErnst Theodor Wilhelm Hoffmannです。



今、世界で一番の「夜の女王の aria」の歌手は、ディアナ・ダムラウでしょう。

夜の女王の aria は、『魔笛』のハイライトとして有名な、ソプラノ・aria の最高峰です。

いかがでしたか？人生は苦難の連続です。マリーやアンゼルスのように、ホフマンの描く主人公たちは幻想と現実の間で葛藤しながらも、常に正しく生きようとして試練を乗り越えていきます。そんな彼らの姿に感動し、読者は勇気をもらうのです。

ファンタジーとは、幻想の世界での出来事にも善と悪があり、物語という枠組みの中で、真善美が勝利するというおとぎ話です。しかし、その作り事は、現実の世界で私たちが正しく生きていくために必要なすべてのことを教えてくれます。そう、ホフマンの作品には、愛と勇気と希望が溢れているのです。

夢に溢れたホフマンの作品は、かつて子供だった大人がああ頃の夢や希望を思い出し、純粋な自分を取り戻すための冒険への扉なのです。こうした童心に帰る瞬間こそ、人生をより愉しく生きるための魔法なのかもしれません。

